

●教室(診療科)の特色●

形成外科は近年になり急速に発達した学問で、現在も発展し続けています。

新しいアイデアと発想でまったく新しい術式が生み出され、それがスタンダードな術式に成り代わる可能性を秘めています。また患者さんによって症例が1例1例異なるので、その人にあった一番よい方法を熟考しなければなりません。現在は患者さんが医師の技量と人柄を見て、受診をする時代です。

その期待に応えるため、医師は常に自分の技術を磨き、患者さんに合った最良の方法を考え、さらに優れた新しい治療方法を考える想像力を養うことが必要とされています。

このような自由な発想は、いろいろなジャンルの本を読んだり、いろいろな職種の人と話をすることによって培われ、アイデアも浮かびます。また、国際学会で研究成果を発表することもあるので、広い世界を意識してほしいと思います。



上田 晃一(うへだ こういち)教授(科長)

■専門分野

頭蓋顎顔面外科、マイクロサージャリー、唇顎口蓋裂、ケロイド・肥厚性瘢痕

■職歴

昭和34年 12月生まれ

昭和59年 大阪医科大学卒業後、大阪医科大学形成外科学教室(田嶋定夫教授)に入室、臨床研修開始

昭和61年 高知県近森病院で外科と救急医療研修(2年間)

平成 元年 埼玉医科大学総合医療センター形成外科、マイクロサージャリーの研修(2年半)

平成11年 英国Oxford大学Department of Human anatomy & Geneticsに 留学(1年間)

平成12年 大阪医科大学助教授(形成外科学教室)

平成16年 大阪医科大学教授(現 大阪医科薬科大学)

■主な学会/専門医資格

日本形成外科学会(形成外科専門医、皮膚腫瘍外科指導専門医)、小児形成外科分野指導医、日本頭蓋顎顔面外科学会(専門医)、日本手外科学会専門医、日本マイクロサージャリー学会、日本美容外科学会、日本抗加齢医学会、日本創傷外科学会、国際顎顔面外科学会(Associate Member)、日本形成外科手術手技学会理事長、日本口蓋裂学会理事、国際マイクロサージャリー学会(Active Member)

■研究課題

抗接着分子抗体を用いた皮弁の再灌流障害の防止および同種皮弁移植の拒絶反応の抑制
ケロイド・肥厚性瘢痕のエネルギー代謝、遊離筋弁移植による顔面表情筋の機能再建
唇裂外鼻変形の治療

●教室(診療科)の概要・特徴●

形成外科は、皮膚をはじめとする軟部組織や骨組織を含めた顔面全域など広い範囲を対象とする診療科です。

大阪医科薬科大学では、顔面外傷、顔面骨骨折、頭蓋顎顔面の先天異常や変形に対する三次元実体模型、三次元画像を用いたシミュレーション手術、唇顎口蓋裂に対する総合的治療、外傷や悪性腫瘍切除による組織欠損やマイクロサージャリーによる治療、Qスイッチアレクサンドライトレーザー、Vビームレーザーを用いた各種あざの治療を積極的に行っています。

●教室(診療科)指導医・上級医●

氏名(職掌)	専門医	参加学会
塗 隆志(診療准教授)	小児形成外科分野指導医、再建マイクロサージャリー分野指導医ほか	日本形成外科学会、日本マイクロサージャリー学会ほか
大槻祐喜(講師)	形成外科専門医、日本創傷外科学会専門医、再建マイクロサージャリー指導医	日本形成外科学会、日本乳房オンコプラスティック学会ほか
廣田友香(講師(准))	形成外科専門医、小児形成外科分野指導医	日本形成外科学会、日本口蓋裂学会ほか
光野乃佑(助教)	形成外科専門医、小児形成外科分野指導医、日本創傷外科学会専門医	日本形成外科学会、日本創傷外科学会

■連絡先：大阪医科薬科大学形成外科学教室 TEL:072-683-1221

■ホームページ：<https://www.osaka-med.ac.jp/deps/pla/>

初期研修プログラムの特徴

形成外科は、年間入院手術 500例、外科手術 1,200例と豊富な症例数を有しています。先天異常、顔面外傷、再建を含めて形成外科学全般に関して幅広い専門研修を受けることが可能です。

形成外科の初期研修は、形成外科学全般の知識と臨床能力および技術を修得することを目的とし、形成外科領域のいかなる分野の診療、手術技術においても習熟した形成外科専門医の育成を目的としています。

当科の特徴

1. 唇裂口蓋裂

出生前診断にて唇裂と診断された胎児の母へのカウンセリングから成長に応じた手術まで長期にわたり患者との関係を重視した治療を行っています。唇裂特殊外来では言語療法士外来も併設しており、言語機能発達に合わせた治療を行っています。

2. 乳房再建

近年乳がん切除後の乳房再建術は需要が高まっており、大阪医科薬科大学および連携施設においても乳腺外科と密な連携を取りながら遊離穿通枝皮弁や動脈皮弁、人工インプラントを用いた再建術を行っています。また近年では、再建の質を高めるために3Dカメラを用いた術前シミュレーションを行っています。

3. リンパ浮腫に対するリンパ管静脈吻合

顕微鏡を用いて径0.5mmほどのリンパ管と静脈の吻合を行うリンパ管静脈吻合術は、スーパーマイクロサージェリー技術を用いて行われます。乳癌や婦人科疾患の手術後や外傷などで発症する上肢や下肢のリンパ浮腫に対して手術が行われ、院内だけでなく他院からの紹介も多く、良好な成果を上げています。大阪医科薬科大学では理学療法を目的としたリンパ浮腫看護外来も併設しており、保存的治療から外科治療まで幅広く行っています。

4. 小耳症外来

小耳症に対して、肋軟骨を用いた耳介形成術を行っています。また、耳鼻科と共同で聴力の改善が見込まれる症例に対しては同時に鼓室形成術もおこない、整容面と機能面を考慮した治療を行っています。

5. 頭頸部再建やフットケアなどのチーム医療

複数の診療科と合同で治療を行うチーム医療において、当科は再建外科としての重要な役割を担ってきました。頭頸部領域では30年以上前から、耳鼻科、脳外科、食道外科と協力して悪性腫瘍の治療を行っています。また、他科や地域医療と連携が必要なフットケアにも力を入れています。

6. 難治性潰瘍における創内持続陰圧洗浄療法

2004年より局所陰圧閉鎖療法に持続的な洗浄機能を付加した創内持続陰圧洗浄療法を開発し、豊富な経験と数多くの論文を発表しています。主に難治性潰瘍（縦隔洞炎、褥瘡、下腿潰瘍など）に対して本法を施行しており、その治癒率は飛躍的に向上しています。



6年目専攻医：顕微鏡を使用した血管吻合の練習風景

さらに開放骨折の初期治療や脳外科領域の感染などに対しても臨床応用しています。

7. レーザー治療

小児を中心にあざや血管腫に対してレーザー治療を行っております。広範囲のものに対しては全身麻酔下に行っています。

8. 頭蓋縫合早期癒合症

頭蓋縫合早期癒合症に対して、脳神経外科と合同で頭蓋形成術を行っており、県外からも患者様が来院されています。

また、専門研修プログラムでは地域医療の研修が可能です。具体的な到達目標を以下に示します

研修内容と到達目標

<1年目>

- ・形成外科入院患者を、主治医の指導のもとで診療する。
- ・形成外科疾患全般の病態を把握し、的確な診断、治療計画、症例のプレゼンテーション、手術計画を行う。
- ・各疾患に対する画像診断を含めた術前準備、術後管理方法を修得する。
- ・形成外科疾患における処置を修得する。
- ・形成外科領域における臨床論文を作成する。

<2年目>

- ・形成外科疾患の各分野についての病態、診断、治療についての知識を深め、手術手技を身につける。
- ・各症例の問題点を的確に指摘し、適切な手術計画、術後管理方法について提示できる。
- ・全層、分層の皮膚採取、自家骨採取、筋膜採取を行う。
- ・1年目の指導を行い、各疾患への理解を深めるとともに、自身の1年目で修得した診断、治療の技術の習熟につとめる。

週間スケジュール

月曜日	病棟回診、外来診察 合同手術（頭頸部再建、乳房再建）、病棟にて患者診察
火曜日	形成外科メインの手術日 術前術後カンファレンス
水曜日	手術、合同手術（乳房再建） 病棟にて患者診察
木曜日	形成外科メインの手術日 レーザー治療 術前術後カンファレンス
金曜日	外来診察 病棟にて患者診察
土曜日	手術または外来診察 病棟にて患者診察

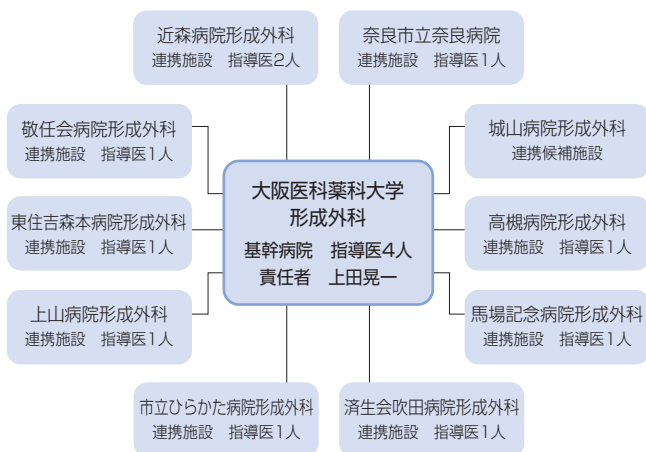
後期研修プログラムの特徴

日常の臨床から得られる、様々な問題点から発展した臨床研究を積極的に企画し、実践する能力を身につけることができる研修システムを構築しています。具体的には、①学会報告や症例報告、②臨床研究から論文作成、③当科と連携を深めている形成外科疾患研究における基礎リサーチへの参加、などがレジデント研修期間に可能です。

研修プログラム

大阪医科薬科大学形成外科の後期研修プログラムは、大阪医科薬科大学形成外科を基幹施設として市立奈良病院、近森病院形成外科、東住吉森本病院、高槻病院、馬場記念病院、彩樹守口敬任会病院形成外科、済生会吹田病院形成外科、市立ひらかた病院形成外科を連携施設、さらに城山病院形成外科、上山病院を連携候補施設として形成されている。以上の施設には形成外科専門医が在籍しているため、形成外科専門医の指導の下で修練を行なうことができ、形成外科専門医の修練として重要な期間を送れるように指導体制も整えている。

ただし、関連病院での修練開始時期、修練期間については、個々の状況に応じて調節する。



研修風景

研修内容と到達目標

- ・3年目までに修得した知識と技術を元に、手術を計画、施行を行う。技術、知識の修得度に応じて症例に対する手術を行う。
- ・主治医とともにまたは主治医として、手術計画、術後管理を立案し、実施する。
- ・マイクロサージャリーによる神経縫合
- ・皮弁術のドナー閉鎖
- ・良性腫瘍の切除、植皮等による再建術の執刀(指導医のもと)
- ・入院中のみならず退院後の外来診療を合わせて行う。
- ・大学のみならず連携施設での研修を行う。
- ・経験した症例について学会発表を行い、論文作成を行う。
- ・学会、研究会で発表を行い、論文作成を行う。

評価方法

「形成外科専門医受験資格」の基準症例を用いて、形成外科疾患の受け持ちが万遍なく行われているかどうかを基準に行う。また、術前術後カンファレンスでの発表内容からも合わせて検討する。なお、形成外科専門医の取得には、形成外科の臨床に基づく論文発表が義務づけられているので、できるだけ多くの症例を経験して、学会発表、論文発表に努める必要がある。

取得できる認定医・専門医

日本形成外科学会専門医、日本頭蓋顎顔面外科学会専門医
日本レーザー学会専門医、日本創傷外科学会専門医
日本形成外科学会小児形成外科分野指導医
日本形成外科学会皮膚腫瘍外科分野指導医
日本形成外科学会再建・マイクロサージャリー分野指導医
日本形成外科学会レーザー分野指導医

参加学会等

日本形成外科学会／日本頭蓋顎顔面外科学会／日本創傷外科学会
／日本マイクロサージャリー学会／日本乳房オンコプラスティックサージャリー学会／日本口蓋裂学会／日本シミュレーション外科学会／日本熱傷学会／国際マイクロサージャリー学会／国際頭蓋顎顔面外科学／CLEFT／会創傷外科学会／日韓形成外科学会／日本手外科学会／日本リンパ学会／日本リンパ治療学会／その他多数



国際学会 in Oxford

大学院における研究活動

教室独自の研究

- ケロイド・肥厚性瘢痕のエネルギー代謝
- 静脈皮弁のdelayに関する研究
- 顔面骨骨折の固定における力学的解析
- 三次元モデルを用いた頭蓋顔面骨切り術のシミュレーション手術
- 三次元画像を用いた乳房形態評価方法に関する研究
- 三次元解析ソフトを用いた各種計測
- リンパ浮腫の解析
- 眼瞼下垂におけるMuller筋の変性に対する研究
- 一眼レフ3Dカメラの臨床応用
- AR技術を活用した手術時情報共有システムの開発

本学での共同研究

- 薬理学教室
W9ペプチドと幹細胞を用いた新しい骨再生治療の開発
- 生理学教室
ノックアウトマウスを用いた発毛の研究および腫瘍免疫の研究
- 解剖学教室
ケロイド増殖におけるオートファジー効果の研究

他大学との共同研究

- 東京医科歯科大学歯学部分子発生学教室
頭蓋縫合早期癒合症の発生メカニズムおよび治療

先輩レジデントのコメント

岡本 貴恵 2022年度レジデント

充実した後期研修

元来ものづくりが好きな私は、大学生の頃から形成外科に興味がありました。いざ入局した今、自分の選択は間違っていないかという日々感じています。形成外科が対象とする疾患は頭から足先まで、年齢層も乳幼児から高齢者まで幅広く、学ぶことも様々です。そのため、大変なこともあります。そういった部位や年齢に加えて、整容面や機能面、患者さんの社会的背景、予後など様々な要素を考慮して多くの選択肢から治療を検討し実践していく奥深さこそ形成外科の魅力だと感じています。

また、大学では、複数のチームに分かれて診療にあたっており、レジデントは各チームをローテーションしながら研修を行います。先天疾患、マイクロサージャリー、乳房再建、一般形成など、専門分野ごとのチームで、皮膚腫瘍や外傷などはすべてのチームで診療しています。先述したように診療範囲が多岐にわたる形成外科ですが、このようにローテーションすることである程度まとまって同じような症例や術式について学ぶことができるため、私のような不器用な人間でもとても学びやすい環境だと感じます。上級医の先生方も多くのことを指導してくださり、何かあった時には全力でサポートしてくれますし、同期も資料を共有しあったり、教え合いながら和気藹々とした雰囲気でもとても充実した日々を過ごすことができます。進路に迷われている方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度足を運んでみてください！

大橋 剛輝 2018年度レジデント

熱意に応えてくれる医局

大阪医科大学で取り扱っている形成外科疾患は外傷や皮膚腫瘍といった一般形成外科の他に小児先天異常、他科の再建、マイクロサージャリーと多岐に渡ります。2018年に大阪医科大学形成外科に入局した最初の1年は毎回見たことのない手術の連続で、知識も技術も圧倒的に不足しており、形成外科という広大な分野の全容すら見えずに途方にふけていた事を思い出します。

しかし大学病院や関連病院の先生方のご指導の元、手探りで1年、2年と過ぎるうちに少しずつですが出来る手技が増え、手術中に見えてくる景色が変わり、点と点であった自分の知識や技術が一本の線に繋がっていく事を感じ取れるようになってきました。淡々と進んでいるように見えた手術にはこのような工夫があったのか、少しの工夫でこんな結果が変わるのかと新たな発見があればますます形成外科の手術の面白さがわかってくるようになると思います。

現在入局後4年が経過しようとしていますが、自分が希望したマイクロサージャリー班に1年間所属し、頭頸部再建などかつて自分には全く手が届かないものだと思っていた手術に携わせて頂き、忙しくも充実した毎日を送っております。

上司の先生方は我々レジデントの日々の努力、成長など必ず見て下さっています。僕自身まだまだ未熟者ですが、ここは熱意を持って取り組みれば必ずステップアップ出来る医局だと実感しています。将来形成外科でキャリアを積みたい方や興味はあるけど進路に悩まれている方はぜひ一度大阪医科薬科大学に見学に来て頂ければ幸いです。

李 受娟 2022年度レジデント

当科へ入局してみても

もともと細かな作業が好きで、手術方法やデザインの仕方も多岐にわたり患者さんの満足度にも直結するような形成外科に魅力を感じていました。そこで次に迷うのが、どの医局に入りたいかということでしたが、当院の決め手の1つが“術後のホワイトボードでのプレゼン”でした。限られた日程での病院見学では、どの大学病院も雰囲気よさや症例の豊富さを感じることができましたが、当院では専門医試験でも役立つような人前でのプレゼン力を養えると思いました。実際入局後にやってみるとなかなか難しく大変な思いもしましたが、術前にあらかじめ書いてみると予習になるし、術後は手術内容の復習になるだけでなくカンファレンスでのフィードバックを受けやすかったです。

またチームに分かれて数か月単位でローテートすることで、幅広く専門性の高い領域の知識を基礎から学べるため、レジデントとして恵まれた環境だなと感じています。さらに、手取り足取りではあるものの、丁寧なご指導を受けながらの手術執刀や学会発表といった機会も与えていただきました。

まだまだレジデントとしては始まったばかりで、様々な症例を経験し知識や技術を吸収している段階ですが、充実した毎日が送れています。女性医師も多いのでプライベートなことも相談しやすく、医局の雰囲気もとてもいいので、少しでも興味があれば気軽に見学に来ていただければ幸いです。